

2011年8月のブータン王国からの来賓招聘 —ドルジ・ワンチュク氏事務次官就任に寄せて—

坂本龍太^{1,2)}、奥宮清人²⁾、松林公蔵²⁾

1) 京都大学白眉センター

2) 京都大学東南アジア研究所

我々は毎年ブータン王国から来賓を招聘してきたが、その始まりとなった2011年8月の招聘についてここに報告したい。来日したのは、当時保健省医療サービス局局长であったドルジ・ワンチュク氏、タシガン県知事ルンテン・ドルジ氏、当時保健省医療サービス局主任企画官であったナワン・ドルジ氏、タシガン県保健局長ツェワン・ドルジ氏、カリン診療所長ケサン・ラドン氏の5名であった。滞在中、京都、高知、広島を訪問し、シンポジウム「ブータン及び日本における高齢者ケアの現状と課題」を総合地球環境学研究所と京都大学東南アジア研究所の共催で行った。

キーワード：ブータン王国保健省、総合地球環境学研究所、京都大学

はじめに

ブータン王国保健省からの来賓の招聘計画が具体的に動き出したのは、総合地球環境学研究所（地球研）プロジェクト「人の生老病死と高所環境：「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応」（高所プロジェクト）の一環で、ブータン王国において高齢者ケアに関するプロジェクトを開始する際に、京都大学の旧くからの友人であるカルチュン・ワンチュク氏の助言を得てからである。日本からの医者や研究者がブータンに行くだけではなく、ブータンから協力者を招いて我が国の現状、抱える課題を共有することが、両国が手を携えてプロジェクトを進めていく上で不可欠であると考えたからである。我々は、当時保健省医療サービス局局长であったドルジ・ワンチュク氏に対し、彼と医療サービス局主任企画官の計2名を招聘したい旨を伝えたが、ドルジ・ワンチュク氏から、両者が日本へ行くことは省として許可を出せないかもしれないので、その代りにプロジェクト開始の拠点となるカリン診療所のスタッフを日本に呼んで欲しいという希望を告げられた。その後、ブータンで活動を進める中で、中央省庁、診療所だけでなく、県の役割の重要性を認識したため、保健省中央から2名、県から2名、診療所から2名の計6名ということで招聘を打診したが、先方から保健

省中央から2名、県から2名、診療所から1名の計5名にしたいと申し出があったため、結局、当時保健省医療サービス局局长であったドルジ・ワンチュク氏、タシガン県知事ルンテン・ドルジ氏、当時保健省医療サービス局主任企画官であったナワン・ドルジ氏、タシガン県保健局長ツェワン・ドルジ氏、カリン診療所長ケサン・ラドン氏の5名を招聘することとなった。

一日目(2011年8月4日)

関西国際空港北側国際到着口の扉が開き、ブータンにおいて活動を共にやってきた5人の姿が現れた。「おおっ！」と再会を喜び、そのままMKスカイゲイトシャトルのカウンターに向かった。車で京都に向かう途中、空港が海を埋め立てて造られた人工島の上にあることを知って一行は驚き、「日本は世界で最も発展した国だ」とおっしゃっていた^{注1)}。京都市内のパレスサイドホテルに着き、長旅の疲れも見られたので、ホテル内で軽食を取った後、夕食まで部屋でゆっくり休んでいただくことにした。今回のメンバーにはベジタリアンの方がいらっしやなかったので、夕食はホテルの近くの白山白という焼肉店を予約していた。牛肉の各部位とおかわりの御飯が次から次へと出てくるので、一行は「まだ出てくるのか」

と身体をのけぞらし、「こんなに肉を食べたのは生まれて初めてだ」とお腹をさすっていた。日本酒も試し、特にタシガン県保健局長ツェワン・ドルジ氏は熱燗がすっかり気に入ってしまったようであった。

二日目(2011年8月5日)

同じく高所プロジェクトの一員であった京都大学東南アジア研究所の安藤和雄氏の案内で、貸切りの車で美山町に向かった。美山町に到着し知井振興会の名古友弘氏及び岩間孝弘氏から実際のデータを手に、町の現状を説明いただいた。65歳以上の高齢者が半数を超える限界集落が多く存在すること、近い将来、集落が次々と消えてしまうかもしれないことに一行は衝撃を受けているようであった。保健省主任企画官ナワン・ドルジ氏は「日本は発展しているというイメージが強かったが、こういう問題が存在していることがよくわかった」と話した。振興会を後にして車で美山町の知見という集落に向かった。杉林で安藤氏は「ちょっと運転手さん、すいません。ここで止まってください」と言い、皆を車から降ろした。「見てください。昔ここは全部農地だったんですよ。それがこんな風にスギが植えられている。なぜだかわかりますか？農業をする若者がいなくなった。これが日本の地方の現実なんです」と安藤和雄氏は話し、「こんな良質な農地が、若者がいないせいで放棄されているんです。ケサンさん、ここで暮らすのはどうですか？」と言った。保健省局長ドルジ・ワンチュク氏は「おお！ケサン、それがいい」、ナワン・ドルジ氏も「京都市内まで車で一時間半ほどの距離だから全く問題ない。自然に恵まれ最高の場所だ」と言った。カリン診療所長ケサン・ラドン氏は安藤和雄氏の突然の振りに「うーん。」と戸惑っていたが、まんざらでもなさそうであった。続いて、かやぶきの民家や美山町民俗資料館を見学した。住民たちが昔懐かしい羽子板などの玩具や御櫃や鏡台などの日用品、脱穀機などの農具や古文書などを持ち寄ることで展示が成り立っていた。囲炉裏に座り、お茶を飲みながら美山町の方のお話を伺い、自らの地域の伝統文化を何とか継承し、魅力を発信しようとしている志に感銘を受けておられた。ブータンでも農村から都会への若者の流出は加速しており、今

ブータンの農村の文化を守らなければ急速に失われてしまうという危機感を持ったようで、タシガン県知事ルンテン・ドルジ氏はポロッとこう呟いた。「今まで私は、タシガンの子供達をつかまえて、しっかり勉強してティンプーに行けよ、と発破をかけていたけど、間違っていたかもしれない」

美山町のある南丹市の市役所では、過疎高齢化の現状について説明をいただいた。山間地において医療環境に恵まれない地域が存在し、14歳以下の年少人口がこの45年間で約7割減少し、このまま推移すると2018年度には小学校18校のうち9校が2つ以上の学年を1つにする複式学級になるという予想もあるという。農地の管理や共有林の育成、消防活動等が非常に困難になっており、地域コミュニティの維持が危惧されているのだ。高齢者単独世帯は、1985年の428戸（総世帯の4.2%）から2005年には1049戸（8.5%）に倍増している。ナワン・ドルジ氏は「これは統治の問題だ。政府がリーダーシップを発揮してきちんと統治しなくてはならない」と話されていた。

三日目(2011年8月6日)

美山町に一泊後、一旦京都市内のホテルに戻ってすぐに京大で開かれるシンポジウムに参加することになっていた。一行はこの日のためにブータンから自慢の民族衣装を持参してくださっていた。当時、五代国王夫妻の来日より前で、ブータン旋風が巻き起こる前であったが、用意していた50名分の席が全て埋まり、椅子を少し追加した。エンジや黄色、橙色など色彩鮮やかな民族衣装を身にまとった5名が入場すると、雰囲気が一変と華やぎ、会場は温かい拍手に包まれた（写真1）。シンポジウムは今回の彼らの渡航の招聘元である高所プロジェクトのリーダー奥宮の歓迎スピーチで幕を開けた。

ブータン側は、タシガン県知事ルンテン・ドルジ氏がマイクに立ちこう述べた。「まず初めに、2011年3月11日の震災で犠牲となった方のご家族に心より哀悼の意を捧げたいと思います。震災は人の命と財産に計り知れない損害をもたらした最悪の悲劇でした。人々は今も困難を抱えておられますが、彼らがたぐいまれな勇気や思いやり、立ち直る力を発揮されていることに心を熱くしています。私には決して忘れることができないこと



写真 1 シンポジウムにて（小林尚礼氏撮影）



写真 2 昼食



写真 3 土佐町長寿健診にて



写真 4 民宿にて



写真 5 土佐の一タ



写真 6 友好

が一つあります。それは、被害にあわれた御家族が、愛する人、家、財産という理解を超える損失に直面してなお、規律と自制を保ちながら振舞われていたことです。こういう社会こそが他に類を見ない真の意味での品格のある社会なのだと思います」ルンテン・ドルジ氏はその後、個人的な見解として、ブータンは王政により秩序が保たれてきたこと、2008年から国王自らの意向で立憲君主制に移行したこと、ブータンが経済的な自立や若者に関連する社会問題、温暖化による氷河の退縮の問題などの課題を抱えていることを述べた。そして、高齢者に関して、若者が雇用機会や楽な生活を求めて高齢の両親を残して村を離れ都会に出る傾向がブータンにもあるが、社会の結びつきや骨組みはまだ力強く保たれていること、そして、高齢者が昔と変わらずに家族や社会から尊敬されていると話した。

保健省局長ドルジ・ワンチュク氏はブータンにおける保健体制について発表した。1914年ブータン人45名の英領インドへの派遣留学からの先駆者たちの系譜、1961年から開始した国家5カ年計画からの発展、現在の保健省の組織についての解説があった。医療費の高騰、医療物資の輸入への過度の依存、高まる住民の医療への要求に対して医療費無料の現体制の中でどのように答えていくか、山岳地帯でいかに医療へのアクセスを高めていくか、医療人材の不足、非伝染性疾患の顕在化、災害への対応などの課題にも言及された。

保健省主任企画官ナワン・ドルジ氏は国民総幸福の観点から考えれば、高齢者が健康を最大限享受すること、全ての人生活動に積極的に参加すること、高齢者の安全の保証を促進すること、喜びを持ちながら老いを迎えられること、コミュニティが高齢者を歴史の語り部、価値のある存在として尊重すること、死を終末としてではなくつながりの中の一時点としてとらえ準備すること、語らひを通じて高齢者が持つ遺産を次世代に継承すること、高齢者のケアは、まずは高齢者自身や家族、隣人、それでも手に負えないときは政府、というように協力して行うべきであると話した。そして、カリンにおいて高齢者ケア計画が地域リーダーや地元住民の全面的な支援を得て開始されたこと、既存の保健体制を生かし、予防を重視し、定期的な健康診査を核に据える本計画の有用

性を村、県、国、全てのレベルが納得したこと、予算や医療人材の不足などの課題を克服し持続可能な形でプライマリーヘルスケアに統合していく必要があることを述べた^{注2)}。

タシガン県保健局長ツェワン・ドルジ氏は基礎的な統計データを示しながらタシガン県の保健行政の現状を述べた。人口48783を3つの病院と22の診療所が管轄していること、2009年時点で65歳以上の高齢者はタシガン県に2494名いる。44名の診療所スタッフをトレーニングし、地域のボランティアである村の保健担当係と協力しながら計画を促進していくことの重要性を話した。そして、カリン診療所長ケサン・ラドン氏は我々が行ったカリンでの高齢者健診について話した。

日本側は、松林がフィールド医学の歩みを本邦及びアジア諸国でのこれまでの実績を交えて示し、当時厚生労働省老健局老人保健課主査であった大淵雪栄氏が我が国における介護保険制度の背景と現状、そして未来への展望についてご発表いただいた。

講演後、フロアからブータンのしあわせについて活発な議論が交わされた。その中で、座長を務めていた福井大学の月原敏博氏から「日本の孤独死についてどう思いますか？」と質問が出た。東京都監察医務院が公表しているデータによると、東京23区内で65歳以上の方の孤独死は2003年から2010年の7年間の間に1451名から2913名に倍増しており、誰にも看取られることなく、亡くなったあとに発見されるような孤独死を身近な問題だと感じる方の割合は、60歳以上の方の4割を超えているのだ^{注3)}。

シンポジウムの締めは国立民族学博物館の栗田靖之氏であった。栗田氏は前に進み出ると、東日本大震災に際してブータンがいかに深い心を持って接して下さったかを話し、ブータン側に感謝の辞を述べた^{注4)}。シンポジウムの閉めは、その語源に従い、共にお酒を飲んだのであった。

四日目(2011年8月7日)

ショッピングモールに出かけたりしながら、ひと時の休息をお取りいただいた。昼食は下鴨本通り沿いの「下鴨坦々」というお店に入った。トウガラシに飢えていた一行に坦々麺は大好評で、大盛りを二杯完食した上で、店主御夫妻に「間違い

なくヒットするから、ぜひティンブーに開業してほしい」と懇願されていた（写真2）。

五日目（2011年8月8日）

列車で高知県に向かった。車窓から見える青々と茂る森を眺め、「まるでブータンのようだ」と声が上がった。高知県庁に直接向かい、副知事に表敬を行った。その後、高齢者福祉課の方より高知県が進める「日本一の健康長寿県構想」について説明があった。保健省局長ドルジ・ワンチュク氏はそこで、保健政策を進める上で、四つのSが重要であることを話した。Simple（簡潔であること）、Sound（道徳的あるいは論理的にまっとうであること）、Secured（確証があること）、Safe（安全であること）である。その言葉に対して、高齢者福祉課の方は深い関心を示し、仕事をする中で特にSimple（簡潔であること）の重要性を実感していると話した。高知県との会談を終え、レンタカーを飛ばして土佐町に向かった。土佐町での宿泊は清水屋旅館であった。おばあさんが切り盛りされており、地球儀を手にしながら「ブータンはここでしょ」と一行を温かく迎え入れていただいた。

六日目（2011年8月9日）

土佐町町長西村卓氏に表敬を行い、8年前にフィールド医学健診を始動するまで土佐町は高齢者の元気がなく、県下でも介護や医療費が高い方だったこと、健康は宝だと考えた町長は松林公蔵、東京女子医大の大塚邦明氏に相談したことを話した。町長のお母さまも毎年健診を楽しみにしているらしいとのことであった。土佐町、京都大学、東京女子医大、高知大学、総合地球環境学研究所が協同で行っている土佐町の長寿健診会場に向かうと、高齢者と役場スタッフ、学生や教員達が生き生きと健診を行っていた（写真3）。整然と並ぶ高齢者、細かい所まで行き届いた役場スタッフの仕事ぶり、礼儀をもって接する学生や教員達の姿に感銘を受けられたようで会場を見回り、熱心に質問を投げかけていた。清水屋旅館に戻った一行は下着姿ですっきりくつろぎ、スーパーに買い出しに行き、旅館の台所をお借りして、ナワン・ドルジ氏が豚肉と大根と大量のトウガラシを使ったブータン料理に腕を振るった（写真4）。

その後、特別養護老人ホームトキワ苑では、車イスのまま入ることができる浴場や自動的に乗車できる車に驚きの声を上げた。ブータンで伺っていた彼らの考えは「老人ホームのようなものは必要ない」ということであった。トキワ苑では、介護スタッフが高齢者に対し親切に接しており、壁には入居者お手製のひまわりやウサギの貼り絵が飾られており、所内で行う大相撲ときわ場所という催しの結果が掲載されていた。区域ごとに三番地、二番地などの言葉を使い、なるべく町に近い環境を整える努力をされていた。入居者にドルジ・ワンチュク氏が「しあわせですか？」と聞くと「ここはスタッフの方々丁寧に接してくれるからしあわせだと思っていますよ」と答えた。ドルジ・ワンチュク氏は「なるべく老人ホームを作らないという気持ちは変わらないが、高齢者の状況によっては必要かもしれないと思った」と話していた。

七日目（2011年8月10日）

夜は吉野川上流にある早明浦ダムに臨むさめうら荘で毎年恒例の長寿健診大宴会が催された。宴会では、老人クラブの皆様による踊りやハーモニカによる唱歌「故郷」の演奏が披露された。ブータン側からの返礼としてケサン・ラドン氏がブータンの歌を熱唱した。美しい歌声であった。アンコールの拍手が沸き起こり、ケサン氏はもう一曲歌った。そして、よさこい鳴子踊りがはじまった。鳴子が配られ、老若男女を問わず、国境も問わず、皆が踊り回った。♪土佐の高知の・・・よさこい節の調べが繰り返し、繰り返し、響き渡り、土佐町の高齢者、役場スタッフ、医療関係者、学生、大学スタッフなどが一体となった。会場全体が熱気に包まれていた。最後に記念撮影するために集まると、ルンテン・ドルジ氏が突然声をかけてきた。「ちょっと皆さんに御礼の言葉を言わせてくれないか」ルンテン・ドルジ氏は真剣な表情であった。そして、ルンテン・ドルジ氏は前に進み出て、皆に語り始めた。「私はブータンという遠い国から来たわけですが、今日、ここで、皆さんのことをこう呼ばせてください。アバ、アマ（お父さん、お母さん）」筆者自身がこの言葉にグッときてその後何を話されたか詳しく覚えていないが、とにかくルンテン・ドルジ氏は、若者と高齢者、そし

て、日本とブータンという垣根を越えて我々が集まっている今この瞬間にこの場にいられることに感激している、ということを繰り返し力説した。ルンテン・ドルジ氏の一言一言が伝わる度に、鳴子の音色がはじけ、わーという大きな歓声が巻き起こったことを記憶している。この夜のことを松林はある文章にこう書いている。「土佐町の地酒『桂月』の酔いも手伝ってか、知事（ルンテン・ドルジ氏）の瞳は濡れていたようにさえみえる」、「ブータンと土佐町住民の心が一致した一タだった」^{注5)}（写真5）

八日目(2011年8月11日)

朝、清水屋旅館に別れを告げた。おばあさんの温かさに魅了されていた一行は名残惜しそうに車窓から手を振っていた。高知から岡山に向かう特急南風の中でアナゴ弁当を食べた。ナワン氏は帰国時これが最もおいしかったと話した。岡山駅で新幹線に乗り換え、広島駅に広島国際大学の三森康世氏が迎えに来てくださっていた。ホテルに寄って、広島平和資料館に行き、展示を一つ一つ見て回った。彼らは沈痛な面持ちで言葉を失っていた。放射線影響研究所では、広島に原爆が投下された翌月にあたる1945年9月に放射線の影響を調べる日米合同調査団が編成され、1947年3月には原爆傷害調査委員会が開設されたこと、1958年8月には国立予防衛生研究所と寿命調査に関する同意書が交わされ、日米共同研究体制の基盤が確立したことなどの成り立ちについて説明を受けた後、施設の見学を行った。ドルジ・ワンチュク氏は古くからのカルテがきちんと整理された状態で大事に保管され、縦断的にフォローされていることに驚かれていた。広島市総合リハビリテーションセンターは2年前に開設されたばかりの最新の施設で、板張りの広い訓練室の各所で患者と作業療法士の皆様が一心同体となって活気ある訓練を行っていた。夕食は三森氏が我々を「桃季」という中華料理店に招待してくださった。広島で、初対面にもかかわらず心からおもてなししてくださる三森氏のお人柄に一同、感激していた。翌朝、新幹線で老人ホーム、ライフ・イン京都に向かった。英語の教師をされていたという入居者のご夫妻に案内いただいた。ピアノ、ビリヤード台、お茶室、図書館など充実したリクリエーショ

ン設備が印象に残った。ドルジ・ワンチュク氏が入居者の女性に「御歳はおいくつですか？」と尋ねると、「レディーに年齢を聞くのは失礼です」とピシャリと言われ、ドルジ・ワンチュク氏は、「これは一本取られました」とその女性と共に大笑いであった。タクシーでそのまま地球研に向い、当時所長であった立本成文氏に挨拶と今回の訪問の簡単な報告を行い、日本での公式行事を終了した。

九日目(2011年8月12日)

ショッピングを楽しまれ、夕食は京都にあるチベット料理「ランゼン」で召し上がった。

十日目(2011年8月13日)

一行は、関西国際空港から日本を発った。四階のカウンターに荷物を預け、三階のレストランでビーフカレーにアイスコーヒーを飲みながら皆で今回の旅を振り返った。四階に戻り、北出発口のゲートをくぐった後、彼らは何度も何度も振り返り、別れを惜しんだ。友好が強固になったことを確信した。

おわりに

2014年11月3日ドルジ・ワンチュク氏がジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王からパタンといわれる刀剣とスカーフを授かり、ブータン王国保健省事務次官に就任した。前述したように、ドルジ・ワンチュク氏は保健政策を進める上で、四つのSが重要であると言っている。Simple（簡潔であること）、Sound（道徳的あるいは論理的にまとうであること）、Secured（確証があること）、Safe（安全であること）である。今後、彼の指導力によってブータン王国の保健分野が大いに発展することが期待される。我が国もこの四つのSを再確認する必要があるのではないだろうか。今回、友を祝す意味も込めて、多少古いはなしにはなるが、ここに2011年8月に行ったブータン王国からの来賓招聘について御報告させていただいた。ブータンと日本の友好のさらなる発展、そして、世界の平和を願っている（写真6）。

謝辞

ブータン王国保健省及びタシガン県庁、カリン診療所、土佐町、美山町、高知県庁、放射線影響研究所、広島県立リハビリテーションセンター、特別養護老人ホームときわ苑、介護付有料老人ホームライフ・イン京都、ローメンツアーズの皆様、招聘の手続きでお世話になった総合地球環境学研究所事務部、竹田晋也氏、北由貴子氏、佐野綾子氏、野瀬光弘氏をはじめとする高所プロジェクトの皆様、放射線影響研究所及び広島県立リハビリテーションセンターへの訪問をアレンジいただいた三森康世氏、シンポジウムへの厚生労働省からの参加にご尽力いただいた大淵雪栄氏、大竹輝臣様、田中央吾氏、高知県庁での会合をアレンジいただいた浅野圭二氏、介護付有料老人ホームライフ・イン京都への訪問をアレンジいただいた和田泰三氏、シンポジウムのポスター貼りを手伝っていただいた石本恭子氏、ポスター貼付をお許しいただいた京都大学学生生協、国際交流センター、京都大学医学部附属病院、京都大学医学部の皆様、松沢哲郎氏、酒井道子氏、平田加奈子氏をはじめとする京都大学ブータン友好プログラムの皆様、榊原雅晴氏、シンポジウムの情報をJICA メーリングリストに流していただいた吉田司氏、松林ゼミやシンポジウムに参加くださった皆様、そして、ここに挙げることができなかった御世話になった全ての方々に心より御礼申し上げます。

注

- 1) この言葉には色んな意味が含まれているのかもしれない。筆者がカリン滞在中、テレビにある国で人工島を造り一大リゾート地にしようとしている映像が流れた。それを一緒に見ていた友人が、「自然をこんな無茶苦茶にして」と呆れていたのだ。日本の映像がでたこともあった。それは高層ビルが立ち並ぶ中、何人もの人が無表情で横断歩道の信号を待ち、信号が変わるや早歩きで渡る光景であった。イライラしながら信号を待ち、時間に追いつてられるように歩いている。これが友人には異様なものに映ったようで、「こんな忙しい所では、ブータン人はとても生きていけない」と呟いたのだった。
- 2) 我々はブータン王国において、生活の場に根ざした持続可能な高齢者健診体制の構築を目指している。カリンで開始した高齢者健診が2011年11月にブータン東部モンガルで開かれた全国保健会議で認められ、2013年度からの第11次ブータン王国国家五カ年計画に取り入れることが推奨された。現在、カリン地区を続けながらタシガン県全域、ワンディボダン県のサムテガン地区、トンサ県のクワンガラブテン地区、ブムタン県のタンおよびチュメイ地区、その他の地域へと拡げている途上である。
- 3) ブータンにも孤独死はある。家にこもってお祈りをしながら亡くなっていったおじいさんの話を耳にしたことがある。でもやはり日本の現状はブータンの方々の想像をはるかに上回るものだったようだ。
- 4) あの時ブータンでは、お寺でバターランプが灯された他、全国の学校で半旗が掲げられ、生徒や先生方、学校関係者の方々が集い、被災された方々や我々日本国民に対しお祈りが捧げられたのであった。あの震災から二年半後、ブータンの中部ブムタンで一緒に仕事をしていた若い保健師からこう言われた。「僕たちにはお金がない。でも僕たちなりの精一杯のお金を集めて日本に渡した。日本人にとってそんな額のお金は微々たるものなのに、日本の方々はそのお金に対して最高の感謝を持って受け取ってくれた。そのことが僕たちにはうれしかった。あの時、僕はみんな心からお祈りを捧げたんだ」
- 5) ここで、書かれていないことがある。確かにルンテン・ドルジ氏は話しながら感極まって瞳が濡れていたのかもしれない。しかし、それはルンテン・ドルジ氏だけではないのだ。ルンテン・ドルジ氏の隣にいた筆者からはバッチリ見えていた。ルンテン・ドルジ氏の言葉を聞きながら顔を歪めて瞳を潤ませている松林先生のお姿が。

Summary

Honored Guests from Royal Government of Bhutan to Japan in August 2011: Tashi Delek to Dr. Dorji Wangchuk, who was Appointed as the Health Secretary

Ryota Sakamoto^{1,2,3)}, Kiyohito Okumiya^{2,3)}, Kozo Matsubayashi²⁾

1) Hakubi Center, Kyoto, Japan

2) Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Japan

3) Research Institute for Humanity and Nature

From August 4th to 13th, 2011, honored guests from Royal Government of Bhutan (RoGB) visited Japan. The members from RoGB were as follows: Dorji Wangchuk, Director General, Department of Medical Services (DMS), Ministry of Health (MoH); Lungten Dorji, Dzongdhak, Trashigang District; Nawang Dorji, Chief Program Officer, DMS, MoH; Tshewang Dorji, District Health Officer, Trashigang District, Kezang Lhadon, in charge of Khaling Basic Health Unit. The guests visited Kyoto, Kochi, and Hiroshima. They participated into an international symposium “Current Situation and Challenges for the Future of the Elderly Care in Bhutan and Japan”, organized by Research Institute for Humanity and Nature, and Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

Keywords: Royal Government of Bhutan, Research Institute for Humanity and Nature, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University